

ハルナックとレオ・ベック

— キリスト教とユダヤ教の対話を求めて —

Adolf Harnack and Leo Baeck: Dialogue Between Christianity and Judaism

加納 和寛
Kazuhiro Kano

キーワード

アドルフ・フォン・ハルナック、レオ・ベック、『キリスト教の本質』、『ユダヤ教の本質』、宗教間対話

KEY WORDS

Adolf Harnack, Leo Baeck, “What is Christianity?”, “What is Judaism?”, Interfaith

要旨

19世紀から20世紀にかけてドイツ神学界を代表するプロテスタント神学者で教理史家であったアドルフ・ハルナックが1900年に出版した『キリスト教の本質』は広汎な議論を惹起し、その反響はユダヤ教界にまで及んだ。『キリスト教の本質』に刺激を受けたユダヤ教神学者レオ・ベックは『ユダヤ教の本質』を著し、ハルナックのみならず当時のキリスト教界に共有されていたユダヤ教に対する誤解と偏見、特にユダヤ教とはキリスト教が誕生せざるを得なかった暗黒の背景であるという見方への弁証を試みた。

ハルナックとベックが直接対話することはなかったが、『キリスト教の本質』と『ユダヤ教の本質』はそれぞれ両著者のモノローグであるにも拘わらず、ある意味でキリスト教とユダヤ教のダイアログとして読むことができると見る向きもある。この観点から両者の見解を比較検討し、この「対話」が神学に与えた影響を考察する。

SUMMARY

The book “What is Christianity?” (Das Wesen des Christentums), written by Adolf

Harnack, who was a Protestant theologian, church historian, and a representative German theologian of the 19th and 20th centuries, caused much discussion not only among Christian circles but also within Judaism. Jewish theologian Leo Baeck, who was stimulated by Harnack's book, wrote "What is Judaism?" (Das Wesen des Judentums) in order to dispel Christian misunderstandings and prejudices about Judaism, especially the view that Judaism represents the dark historical background out of which Christianity emerged.

Even though Harnack and Baeck never met in person, and both "What is Christianity?" and "What is Judaism?" are written as monologues, some people suggest these pieces can be read as a form of dialogue between Christianity and Judaism. Drawing from this viewpoint, Harnack's and Baeck's works will be compared to see what influence they exerted in the arena of theological dialogue.

はじめに

ベルリン大学神学部教授であった教会史家アドルフ・ハルナック (Adolf Harnack, 1851-1930) は¹、1899年から1900年にかけての冬学期に、キリスト教に関する全学生向けの全16回の講義を行った。この講義の速記録をもとに1900年5月に出版されたのが『キリスト教の本質 (Das Wesen des Christentums)』である。1927年までに同書は日本語を含む14カ国語に翻訳され、同年までにドイツ国内では14版・7万3千部が発行された。これは当時の宗教書の発行部数としては異例の多さで、1900年から1950年までの間、ドイツ国内で聖書をのぞき最も発行部数の多かった宗教書であり続けた。

後述のように、同書はその影響力の大きさ故に、様々な方面から多様な批判を巻き起こした。キリスト教界からの批判もさることながら、当時のユダヤ教神学者レオ・ベック (Leo Baeck, 1873-1956) によって批判が行われたことは興味深い。というのは、そもそも『キリスト教の本質』には特別にユダヤ教に焦点を合わせて取り扱った部分があるわけではない。ただし、題名のとおりキリスト教の本質にかかわる議論を行うならば、ヘブライ語聖書 (旧約聖書) およびイエス・キリストの生涯の周辺環境としての当時のユダヤ教に関して最低限の言及が必要となるであろうことは誰しも考え得るところであるが、『キリスト教の本質』におけるユダヤ教の扱いはまさにその程度のものに過ぎないのである。それにも拘わらずユダヤ教の側から力の入った反応があったことは注目に値すると思われる。

本論文では特にこのレオ・ベックによる『キリスト教の本質』への批判を検討しつつ、その内容について考察する。

1. 『キリスト教の本質』とそれに対する批判

ハルナックの学術的な代表的著作はキリスト教教理史を総括的に取り扱った全3巻の大著『教理史教本 (Lehrbuch der Dogmengeschichte)』であり、その意義は今日に至るまで高く評価されている。これに対してキリスト教に関する入門的な講義録にすぎない『キリスト教の本質』は、むしろ同書が社会に与えた影響の大きさと、その出版によって生じた論争の激しさとによってハルナックの主要著作の一つに数えられる。P・ティリヒ (Paul Tillich, 1886-1965) は『キリスト教の本質』を「世紀を代表する最高の学者の一人の宗教的証言」であって、「世紀の変わり目に膨大な教養人たちにはるかに強い印象を与えた」書物であり、「第一次世界大戦に先立つ教養層にとって重大な意義をもっていた」と、内容についての賛否はともかく、その存在意義と影響の大きさに関して極めて高い評価を下している²。実際のところ、『キリスト教の本質』は発刊と同時にドイツのプロテスタントのみならず、ローマ・カトリック教会を含めた世界のキリスト教界に多くの議論を引き起こした。発刊からわずか数年の間に発表された反論あるいは批判の論文や書籍は枚挙にいとまがない。たとえばカトリックのモダニストであったA・ロワジー (Alfred Loisy, 1857-1940) は、イエスの語った福音と初代教会の教理との間には断絶があるとするハルナックの見解にカトリシズムの立場から反対を表明した³。プロテスタントの保守主義および敬虔主義の立場からはH・クレマー (Hermann Cremer, 1834-1903) が、イエスが語ったこととイエスを信仰対象とすることの二つに福音は分けられるとハルナックが主張したことを批判し、両者は不可分であって、福音書においても一貫してイエスを信仰対象とする福音が語られていると反論した⁴。自由主義神学の立場からはE・トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923) が、ハルナックは「歴史的」方法からキリスト教の本質を導出すると明言しておきながら、実際には最初から一定の前提、すなわちイエスの神の国の説教がキリスト教の本質であるという前提をもっており、それに強く影響されていると批判し、そもそも本質を規定するならば、批判的歴史の普遍的諸原則に従い、それがキリスト教全体に適用されねばならないのに、ハルナックの作業においてはそれがなされておらず、なおかつハルナックの「歴史的・経験的」方法から抽出された「キリスト教の本質」には、本来の経験的に歴史から帰納された概念にあるはずの、未来を志向するはずの発展的概念、すなわち本質から首尾一貫して目的論的に必然的に展開するところの発展的概念が欠けているとした⁵。

これらの批判にも拘わらず、『キリスト教の本質』が重版される際も、ハルナックが本文を改訂することは最後までなかった。ただし、1903年に追加された序文においてハルナックは、これらの批判は『キリスト教の本質』の内容を「キリスト教の本質を、罪から救う宗教として十分に表現していないこと、キリストの人格の意義を過小評価したこと、キリスト教を一種の律法宗教にしたこと⁶」と批判者たちが考えたためだとの理解を表明している。

2. 『キリスト教の本質』の方法論について

さて、当時のプロイセン王国オーバーシュレージエン地方の街オッペルン (Oppeln、現ポーランド・オポーレ) のラビであったレオ・ベックは1901年11月に「キリスト教の本質についてのハルナックの講義 (Harnacks Vorlesungen über das Wesen des Christentums)」と題する論文を発表した。この中でベックは、最初に『キリスト教の本質』の方法論そのものについての批判を行い、その後に自身のユダヤ教という立場から『キリスト教の本質』の内容に関する批判を行っている。ここではハルナックの方法論に対するベック批判を検討していきたい。

ベックは、ハルナックがキリスト教 (とその福音) をイエスの説教により「神の国とその到来」「人の魂の無限の価値」「より優れた義と愛の命令」の3つからのみ成り立っているとしていることに疑問を呈し、イエスが説いたはずの禁欲、無所有、社会的連帯、社会的援助、正義のための闘争の禁止、文化活動への批判などが含まれていないことを指摘し、また、「神の子イエス」も福音とはしていないことを示す⁷。そもそも歴史家の作業というのはただ歴史を物語っているにすぎないのではなく、ベックによれば、歴史的事象に関して判断を下しているものであるが、その際に歴史家が歴史家自身の時代の価値観から重要なこととそうではないものを弁別するようなことはあってはならない。なぜならば歴史家がある事柄を本質的ではないと判断したとしても、当時はそうではなかったかもしれないのであるから、歴史家は歴史的事象を責め立てたり悔やんだりすることはあり得るかもしれないが、裁定の末に否定するようなことは許されないとし、「歴史家による価値判断は決定的たり得ない」とする⁸。ハルナックは『キリスト教の本質』において「生命あるものを見分ける生ける判断力と本当に偉大なものを真に感知する力を持っている者は、福音を見て時代史的な覆いからそれを区別することができる⁹」としているが、ベックによればそれは「芸術家」の視点であって、歴史家がそれを用いれば道を誤るとする¹⁰。そしてそれはひとりハルナックの誤りであるというのではなく、ハルナックがその神学的系譜に連なるところのA・リッチェル (Albrecht Ritschl, 1822-1889) から受け継いだ「遺伝的欠陥」と言

えるものであると指摘する¹¹。というのは哲学者T・ツィーグラール（Theobald Ziegler, 1846-1918）の指摘によれば「人々が信仰信条を価値あるものとし、その価値からその信仰信条の正当性と信仰信条が基礎として用いているものの存在を推論することにより、リッチェルの神学はフォイエルバッハの説、すなわち願望が信仰の父であるという説に近いものとなる。なぜこのように転換してしまうのかというと、そこにはリッチェルの神学の結論、すなわち、初めは相当批判的であるものの、最終的には価値があると認め、また単純で真実なものとして落ち着くところの結論は、人々が何を望んでいるかということにあるからである。確かにそれは心地よいのだが、カント的でもなければ誠実とも言えない¹²」からであるとベックは言う。ベックは同様のことがハルナックの『キリスト教の本質』にも言えるとし、イエスの宗教において本質的なものであるとハルナックが提示したものは、ハルナックにとってキリスト教の本質に思えるものであるとする¹³。つまりそれは過去を見せているのではなく、あらかじめ準備されたイメージを過去に投影しているに過ぎないのであって、ハルナックは書名を『キリスト教の本質 (Das Wesen des Christentums)』ではなく『わたしの宗教 (meine Religion)』あるいは『わたしのキリスト教 (mein Christentum)』とすべきだったとする¹⁴。

ところで、前述のように『キリスト教の本質』はベックをはじめとする数多くの人々の批判にさらされたが、その中でハルナックの方法論そのものへの批判も少なからず見受けられる。クレマーとトレルチの批判はその代表的なものである。クレマーは、ハルナックが伝統的教理の語る福音は二重構造であるとし、核となる福音をイエスの説教のみに限定してしまったことを「非歴史的」な結論であると見る。もし「歴史的」を標榜するならば使徒時代も終局的終末も考慮に入れるべきであり、それがなされていないハルナックの方法論とそこから導出された見解はむしろ教義学的であるとした¹⁵。さらにトレルチはこの批判にトレルチ自身の考えを加えて展開し、本来、本質を規定する作業というのは経験的帰納的歴史記述の方法と精神から育ち行くものであり、それは経験的帰納的な歴史が歴史哲学へと移行する地点にある課題であるにもかかわらず、ハルナックはイエスの説教のみをキリスト教の本質であるとしており、しかもハルナックは差異を提示したり、継続する展開で一致する点を強調することを通してキリスト教の本質を明らかにしようとしているために、歴史から歴史哲学へとというプロセスではなく、反対に歴史哲学的前提から出発してそれに歴史を一致させる作業をしてしまっていると指摘する¹⁶。

このように並べてみると、ベックの批判は、クレマーやトレルチの批判とおおむね同じ方向性を持っているとすることができる。なお、時期的な問題として、ベックがこの批判論文を書いた際（1901年11月発表）、クレマーの批判（1901年9月刊行）はか

ろうじて知りえたかもしれないが、トレルチの批判（1903年）はまだ知ることはできなかった。それにもかかわらず若干28歳の地方都市のラビであったベックが、同時代のドイツの指導的なキリスト教神学者に先駆けて鋭い批判を行ったことは興味深いことと言える。

3. ハルナックのユダヤ教理解について

ベックが、自身の依って立つところのユダヤ教という立場に基づきハルナックに向けた最大の批判とは、『キリスト教の本質』においてハルナックはイエス時代のユダヤ教のあり方に関し、多くの誤解と偏見を持っているというものである。

『キリスト教の本質』においてハルナックは、イエス時代のファリサイ派とは、神とは愛と善であり、悔い改めによる神への回帰が必要であるとの認識をある程度有していたものの、自らの手によって複雑化させた律法により、その認識を曇らせてしまっていたとする。またファリサイ派は神を組織内の秩序としての儀礼行為を監視する専制君主であるととらえ、複雑な律法のなかにもみ神を見いだそうとし、律法によって神を知っていると考え、宗教を世俗の生業（Gewerbe）にしてしまった人々であると断じる。あるいはファリサイ派とは、貧しい人々の窮乏についてほとんど関心のない支配階級に属し、人々の魂を縛り、窒息せしめた人々であるとした¹⁷。

現代から見れば、『キリスト教の本質』に書かれたハルナックのユダヤ教理解は確かに公平さに欠け、不正確に見えるものであり、ユダヤ教をキリスト教誕生に際しての「暗黒の背景」であると考えようとする傾向が見られる¹⁸。それは『キリスト教の本質』中の次の文章において端的に示されている。

イエスはただちに民族の公式な指導者たち、すなわち卑劣な人々とは正反対の方向へ進んでいった。彼らは神のことを、その一家の秩序の儀式を監視する専制君主としてとらえたが、イエスは神の現存のなかで呼吸した。彼ら指導者たちは神を、彼らがその手で山あり谷あり無駄道ありの迷路にしてしまった律法の中にもみ見いだしたが、イエスはあらゆるところに見いだしかつ感じた。指導者たちは神に関する幾多の律法を持ち、それによって神を知っていると信じていたが、イエスは神についてたった一つの掟のみを持ち、それによって神を知っていたとした。指導者たちは宗教を誤った生業にしてしまった——これ以上忌まわしいことはない——が、イエスは生ける神と霊の高貴なることを宣べ伝えた¹⁹。

また、ハルナックはユダヤ教のラビを、学問の領域に閉じこもり、神の言葉から生き生きとした生命力を奪う者であるとし、イエスの言説は彼らとは正反対であるがゆえに同時代のラビたちからはまったく影響を受けていないとした²⁰。

ベックはこのようなハルナックのユダヤ教理解、とりわけファリサイ派とラビに関する見解に異を唱える。ベックから見れば「イエスと同時代のユダヤ教のあり方に関する歴史へのハルナックの無関心は驚くべきもの」であり²¹、たとえばハルナックが提示したファリサイ派のあり方、すなわちファリサイ派を支配階級に属し、祭司たちと同列に置く見方は事実とまったく異なっており²²、それはベックにしてみれば「ぞっとするようなイメージ」ですらあるとし、ハルナックがファリサイ派を、神を律法の中にしか見いださない人々と指摘していることに関しては、「あの教理史（教本）を著した者がこんなことを言うのだ。白を黒と見間違えない人ならば、こんな思い込みはしないはずだ。ハルナックは（ユダヤ教に）反対するために、こんにち読む価値などない文献を一瞥したに違いない」とまで酷評する²³。というのは確かに歴史的に最初に成立したのは律法だが、イエス時代にはすでにヘブライ語聖書における律法以外の諸文書、すなわち預言書、詩編その他の諸文書も存在していたという事実から「歴史的判断」を行うならば、ファリサイ派が「幾多の律法を持ち、それによって神を知っていると信じていた」人々であるなどというハルナックの判断は歴史的判断ではあり得ないとベックは言う²⁴。ファリサイ派の地位についてのハルナックの認識も間違っており、彼らはハルナックの言うような「民族の公式な指導者」ではないのだが、仮にそうだとすると隣人愛を最上の律法として説いたラビ・アキバや、人間が神の似姿であることを説いたベン・アサイ、敬虔な信仰について教えたラビ・シムライはハルナックの提示するファリサイ派や公式な指導者のイメージに当てはまらないのだが、これをどう考えるのか疑問であるとベックは指摘する²⁵。

ベックは、ハルナックほどの学識の持ち主がこのようなユダヤ教認識しか持ち合わせていないことに驚きを隠さなかったが²⁶、実はこれが1900年頃のハルナックに限らず一般的な神学者のユダヤ教に関する見識の実態であり、同時にキリスト教神学界そのものの実態であったとも言える。W・リヒャーツ（Werner Licharz, 1938-）によれば、このようなユダヤ教認識は、ルターからハルナックに至るまで、プロテスタント世界において暗黙のうちに連綿と共有されてきたものであった。すなわち、ヘブライ語聖書のある特定の書物に惚れ込んだりすることはあるものの、ユダヤ教とその神学そしてユダヤ人の歴史についてはほとんど注意を払わないというものである。結果的に、イエスやパウロを理解するためには、ユダヤ教の歴史や神学への理解が欠かせないという認識が、残念ながら長いあいだ希薄であったと言わざるを得ない²⁷。また、R・レントルフ（Rolf Rendtorff, 1925-2014）によれば、ヘブライ語聖書と新約聖書、

ユダヤ教とキリスト教を対照的かつ対立的にとらえ、なおかつヘブライ語聖書とユダヤ教は新約聖書とキリスト教によって克服され、過去のものとなったとする考え方は、2世紀のシノペのマルキオン (Marcion, 85?-160) から始まっているという。この考え方はキリスト教史において受け継がれ続け、近代ではI・カント (Immanuel Kant, 1724-1804)、G・ヘーゲル (Georg Hegel, 1770-1831)、F・シュライアマハー (Friedrich Schleiermacher, 1768-1834)、J・ゼムラー (Johann Semler, 1725-1791)、F・デーリッツ (Friedrich Delitzsch, 1850-1922)、そしてハルナックがこの系譜に連なるとする²⁸。つまりこれは、ひとりハルナックの問題であるのではなく、古代からキリスト教神学が継承してきた認識であり、また問題であったと言えよう。

4. 『キリスト教の本質』 批判から 『ユダヤ教の本質』 へ

バックはその後、1905年に『ユダヤ教の本質 (Das Wesen des Judentums)』を発表する。書名から容易に推測できることだが、同書はすでに取り上げたバックのハルナック批判論文をさらに展開させたものであり、『キリスト教の本質』へのユダヤ教側からの応答の書という性格を持つ。ところが一方で『ユダヤ教の本質』には「ハルナック」や「『キリスト教の本質』」といった言葉が一切登場しないため、形式上はハルナックや『キリスト教の本質』との対話ではなく、ユダヤ教当事者がユダヤ教について弁証するモノログということになっている。しかしバックはユダヤ教の歴史と教理を整然と説きながら、同時にプロテスタントにおいて広く共有されてきたユダヤ教に対する誤解に対し、丁寧に訂正をほどこそうと試みているところから、この書を単なるモノログではなく、広くユダヤ教とキリスト教とのダイアログを試みていると受け取る方が内容的には適切であるように思われる²⁹。

『ユダヤ教の本質』は、全体は事実上2部構成になっており、第1部ではユダヤ教の歴史と内実の変遷が語られる。第2部では教理の分析と解説が「神への信仰」と「人間への信頼」すなわち自己、隣人、人間全体という主題別になされている³⁰。

この構成は、第1部と第2部の順番を入れ替えると、『キリスト教の本質』の構成にほぼ重なる。というのは、『キリスト教の本質』では、第1部で福音の分析と解説がなされ、第2部でキリスト教教理の歴史が語られる2部構成になっているからである³¹。

また『キリスト教の本質』の特徴として、体系的な神学書や哲学書によく見られる、いわゆるプロレゴメナ (序論) を欠いていることが挙げられる。議論の中心となる主題や全体を導く方法論は最初に明記されず、順を追って明らかにされていくようになっている。同じように『ユダヤ教の本質』にもプロレゴメナがない。したがって『ユダヤ教の本質』の構成は『キリスト教の本質』の影響があると推察することが可

能であろう。

また、方法論については『キリスト教の本質』のなかで「歴史学的方法を用いて、かつ体験的な歴史から得られた生活経験によって答えてみようと思う³²」と述べられているとおり、ハルナックは歴史学的方法により、体験的な歴史的価値判断によってキリスト教の本質を取り出すことを目指すとしている。他方で、クレマーらの指摘によれば、『キリスト教の本質』には教義学的前提があると言う³³。C-D・オストヘヴェナー（Claus-Dieter Osthövener, 1959-）によれば、それは『キリスト教の本質』の以下の一文に表されている³⁴。「キリスト教は、いと高く、単純で、なおかつある一つの点に関係する何かなのである。すなわち、時間のあいだにある永遠の命、神の力のうちにある永遠の命、神の眼前にある永遠の命である³⁵」。これは明らかに歴史的価値判断として帰納的に導出された命題ではない。むしろこの前提からハルナックは議論を出発し、この前提を歴史的に立証しようと試みたとさえ言えるであろう。

では『ユダヤ教の本質』はどうであろうか。ベックは『ユダヤ教の本質』の英訳版序文で次のように語る。「私はユダヤ教が世界史において歴史的に力を及ぼしてきた、そのことの徳の高さに関するあらゆる特徴を端的に紹介しようと努めた³⁶」。他方で、その前提となる主題についても同時に語っている。「この作業は……ユダヤ教の真の本質あるいは内実を描き出す試みである。そこでユダヤ教の普遍性と同じく、ユダヤ教の永遠性と特殊な力強さをも紹介しようと努めた。というのは普遍性というのは、特殊性と個別性から発し、またそれらに依拠しているものだからである³⁷」。ここでベックはユダヤ教が普遍性、永遠性、特殊な力強さといった特徴を本質的に備えていると事実上宣言している。このベックの宣言こそ『ユダヤ教の本質』の前提と言ってよく、その意味でハルナックが『キリスト教の本質』を「永遠の命」という前提に立脚させていたことに重ね合わせることができるであろう。このように、『ユダヤ教の本質』は、方法論および主題においても、内容上の賛否はともかく『キリスト教の本質』にさまざまな面で近似していると言えよう。

5. ハルナックとベックの「対話」

1913年にベックはベルリンのシナゴグのラビに転任し、さらにはベルリン・ユダヤ神学校の教師となり、以後ハルナックとベックは1930年のハルナックの死まで17年間同じベルリンに暮らしたが、2人が直接対談した形跡は残念ながら確認されていない。

他方でリヒャーツは、ハルナックとベックによる架空の「対話」を想定することによって、両者の論争を整理しようと試みている³⁸。ベックによるハルナックへの問い

はすでにいくつか挙げたとおりであるが、ハルナックがこれに何らかの形で返答したかどうかはわかっていない。しかしハルナックの既存の主張から、ベックへのハルナックの応答を推察することはある程度可能であるとする。以下、リヒャーツの構成した「対話」の中から、特にハルナックによるベックへの反論を中心に見てみたい。

まず、ベックの主張の中には、イエスの説教はファリサイ派のそれと比較した場合、目新しいことは何も言っていないというものがある。これに対しハルナックは、自分自身でもイエスの説教にはファリサイ派の主張と同じものが含まれていると既に認識していたと反論する³⁹。しかしながら、たとえ説教の文言は同じでも、ファリサイ派のそれは当時の人々にとって重荷や悩みの種になっていた。というのは、当時の祭司やファリサイ派には「純粹性と誠実さ」が欠けていたので、この弱点ゆえに彼らは人々を拘束し、その魂を損なう結果を招いており、人々から聖書の文言を実行していないという非難を受けていたと反論する⁴⁰。

次に、ハルナックがイエスの福音に含まれる明らかなユダヤ教的要素を福音の中心的要素としてではなく、付随的要素として扱ったことをベックは批判し、そもそもイエスはユダヤ人としてユダヤ教のコンテクストの中で活動した人であり、イエスの言動は徹底的にユダヤ的であるとする。ベックによれば、イエスの特質はユダヤ教だからこそ生まれたものであり、ほかのコンテクストからは生じ得ない。さらにハルナックがパウロをユダヤ教からキリスト教を分離する役割を担ったと主張したことにもベックは異を唱えるが、これに対してハルナックは、ユダヤ教とは「旧約」にほかならず、民族的特殊宗教であり、これに対してキリスト教が普遍宗教であることこそ、その差異の最たるものであるとする⁴¹。

しかしベックによれば、ユダヤ教はもともと普遍宗教なのであって、ハルナックはユダヤ教がこんにちでも宗教として生きていることを無視しているとする。そもそも「隣人を自分のように愛しなさい」はモーセの律法であって、それは単なる哲学ではなく、絶対命令として生きているとする⁴²。

以上、リヒャーツによる架空の「対話」はベックとハルナックの著書をもとに構成されている。両者の相違は（当然ではあるが）並行線をたどったままであるが、リヒャーツによれば、並行線をたどらざるを得ないハルナックとベックの根本的な相違は、その歴史観にある。ハルナックはキリスト教の歴史を、民族的特殊宗教であったユダヤ教がイエスの福音とギリシア思想によって超克され世界的普遍宗教になったという発展の歴史であるのとらえるのに対し⁴³、ベックは時代に応じて新しい強調点や解釈が次々生じていくことが宗教の発展であり永続性であるとする⁴⁴。このベックの主張がハルナックに届いたかどうかは定かではない⁴⁵。

1925年、『キリスト教の本質』の増刷にあたり、ハルナックはその冒頭に新たな序

文を追加している。その中でハルナックは初版発行以後、「キリスト教と諸宗教」の問題をはじめ、さまざまな神学的状況の変化が生じたため、『キリスト教の本質』の増刷をやめるべきではないかと逡巡したことを告白し、同書で行われたことが「不完全な試み」であったことを認めている⁴⁶。リヒャーツはこのハルナックの告白をベックとの架空の「対話」の結論的部分に引用することで示唆的に位置づけている⁴⁷。

結び

既に述べてきたように、ハルナックが『キリスト教の本質』に描いたイエス時代のユダヤ教は必ずしも歴史学的検証の見地からすると正確なものではなく、ほぼ新約聖書の情報のみを典拠としつつ、プロテスタント神学が暗黙のうちに継承してきたその解釈に基づくユダヤ教の像をおおむねそのまま描写しているにすぎない。そしてそれが当時の神学者たちにおける、ユダヤ教に関するごく一般的な見識であった。この状態を打破したのがベックの『ユダヤ教の本質』であり、こんにちのキリスト教神学者がヘブライ語聖書やユダヤ教への理解を深めるためにユダヤ教当事者に耳を傾ける姿勢を多かれ少なかれ持っているのは、この『キリスト教の本質』から派生したユダヤ教論争の影響が小さくないと言ってよい。

後に議論になったことであるが、ハルナックのユダヤ教に関する理解はその死後に国家社会主義、あるいはその同調者たちにつながるものを包含していたのではないかという批判は、あまり妥当性がないと思われる⁴⁸。上記のように、ハルナックのユダヤ教理解はそもそもそこにハルナックの独自性などあまりないものであり、時代状況やそれ以前からの神学史のコンテクストを敢えて無視してハルナックの著述のみから反ユダヤ主義的傾向を読み取ろうとするのは適切とは思われない。むしろ神学者の間でもっと明確な反ユダヤ主義が少なからず見られた19世紀末から20世紀初頭の状況のなかで、ハルナックがそのような傾向を持つ人々やその言説からはあきらかに距離を置いていたことこそ指摘されてよい事実であると思われる⁴⁹。

ハルナックとベックの主張を対比した結果として浮かびあがるものの一つは、リヒャーツのほか、B・クラッパート (Bertold Klappert, 1939-)、A・H・フリートランダー (Albert H. Friedlander, 1927-2004) などの研究者も指摘するように、両者の間に直接の対話がなかったことへの遺憾の意である⁵⁰。時代性の反映にすぎない面も大きいですが、ハルナックがそのユダヤ教理解の貧しさを強く指摘されたことに対し、もしもベックとの直接対話を行い、自らの見解を修正し、ユダヤ教への理解を深めていれば、反ユダヤ主義へ対抗する有力な言説の一つになり得たと推測するのはあながち空想に過ぎないとは言い切れないであろう。ハルナックに対するベックの執拗なまでの

問いかけは、その意味では、宗教間の学術的あるいは実践的直接対話の重要性を示唆しているのではなかろうか。

* 本稿は2010年9月16日に立教大学で開催された日本組織神学会2010年度大会シンポジウムにおいて招待発表した内容を改題の上、大幅に加筆・修正したものである。

注

- 1 一般にアドルフ・フォン・ハルナック (Adolf von Harnack) と表記されるが、ハルナックが爵位を授与され、貴族であることを表す von を名字に冠するようになったのは1914年からなので、1900年前後の事柄を扱うこの論文では von を省いた。
- 2 P・ティリッヒ「キリスト教思想史」『ティリッヒ著作集 別巻3』(佐藤敏夫訳)、白水社、1980年、294頁。
- 3 vgl. Georg Wobbermin, Loisy contra Harnack, in: *ZThK* 1905.
- 4 vgl. Hermann Cremer, *Das Wesen des Christentums: Vorlesungen im Sommersemester 1901 vor Studierenden aller fakultäten an der Universität Greifswald*, Bertelsmann, Gütersloh 1902.
- 5 「『キリスト教の本質』とは何か」『トレルチ著作集 2』(高森昭訳) ヨルダン社、1986年参照 (Ernst Troelsch, Was heißt "Wesen des Christentums"? in *GS* 2.)。
- 6 Adolf von Harnack, *Das Wesen des Christentums*, hrsg. Claus-Dieter Osthövener, Mohr Siebeck, Tübingen ³2012, S. 4.
- 7 Leo Baeck, Harnacks Vorlesungen über das Wesen des Christentums (1901), in: Werner Licharz (Hrsg.), *Leo Baeck- Lehrer und Helfer in schwerer Zeit*, Frankfurt am Main u. a. 1983, S. 12.
- 8 a.a.O., S. 13.
- 9 *Das Wesen des Christentums*, a.a.O., S. 17.
- 10 Harnacks Vorlesungen über das Wesen des Christentums, a.a.O., S. 13.
- 11 ebd.
- 12 Theobald Ziegler, *Die geistigen und sozialen Strömungen des Neunzehnten Jahrhunderts*, Berlin 1899, S. 450f.
- 13 Harnacks Vorlesungen über das Wesen des Christentums, a.a.O., S. 14.
- 14 ebd.
- 15 Hermann Cremer, a.a.O., Vorwort u. S. 224ff.
- 16 E・トレルチ 「『キリスト教の本質』とは何か」、前掲書、44-54頁。
- 17 *Das Wesen des Christentums*, S. 34ff.
- 18 Reinhold Mayer, Art. «Baeck, Leo», in: *TRE* 5. S. 113.
- 19 *Das Wesen des Christentums*, S. 37.
- 20 *Das Wesen des Christentums*, S. 27, S. 35.
- 21 Leo Baeck, a.a.O., S. 19.
- 22 ebd, Anm. 1.
- 23 Leo Baeck, a.a.O., S. 20.
- 24 ebd.

- 25 ebd.
- 26 ebd.
- 27 Werner Lichartz, Ein Gespräch, das es nie gab: Adolf von Harnack und Leo Baeck, in: *Leo Baeck- Zwischen Geheimnis und Gebot: Auf dem Weg zu einem progressiven Judentum der Moderne*, mit einem Geleitw. von Frank Wössner, Karlsruhe 1997, S. 179f.
- 28 Rolf Rendtorff, Die jüdische Bibel und ihre antijüdische Auslegung, in: R. Rendtorff/E. Stegemann, *Auschwitz-Krise der christlichen Theologie*, München 1980, S. 101f.
- 29 ユダヤ教のラビである R・ガイス (Robert Raphael Geis, 1906-1972) は、ベックと同じユダヤ教の立場から『ユダヤ教の本質』を批評しているが、ガイスによれば同書の主眼は「ユダヤ教の存在理由は悲しいかな、光輝くキリスト教の暗黒の背景というところにある」という『キリスト教の本質』が説くユダヤ教への誤解に対する応答であるとしている (Robert Raphael Geis, Leo Baeck, in: *Gottes Minorität. Beiträge zur jüdischen Theologie und zur Geschichte der Juden in Deutschland*, München 1971, nachgedruckt von Werner Lichartz (Hg.), a.a.O., S. 56-61.
- 30 『ユダヤ教の本質』の目次は以下のとおり (1926年版)。
 第二版への序文
 第四版への序文
 第1章：ユダヤ教の特徴
 第1節：統一と発展
 第2節：預言者の宗教と信仰共同体
 第3節：啓示と世界宗教
 第2章：ユダヤ教の諸理念
 第1節：神への信仰
 第2節：人間への信頼
 a) 我々への信頼
 b) 隣人への信頼
 c) 人間への信頼
 第3章：ユダヤ教の維持
 第1節：歴史と課題
- 31 『キリスト教の本質』の目次は以下のとおり (オストヘヴェナー版より私訳)。
 序文
 問題の規定と限定
 I. 福音
 導入と歴史的事柄
 1. イエスの説教、その基本的特質
 1. 神の国とその到来
 2. 父なる神と人間の魂の無限の価値
 3. より勝れた義と愛の掟
 2. 個々の福音のおもな関係
 1. 福音と世界、あるいは禁欲の問題
 2. 福音と貧困、あるいは社会的問題
 3. 福音と正義、あるいはこの世の秩序への問い

4. 福音と労働、あるいは文化の問題
5. 福音と神の子、あるいはキリスト論の問題
6. 福音と教理、あるいは信仰告白への問い

II. 歴史における福音

- 使徒時代におけるキリスト教
- カトリシズムへと発展したキリスト教
- 東方教会主義におけるキリスト教
- ローマ・カトリシズムにおけるキリスト教
- プロテスタンティズムにおけるキリスト教

- 32 *Das Wesen des Christentums*, S. 11f.
- 33 クレマーは、ハルナックが新約聖書が宣教するキリストは事実としてあり得ないとしていることを、ハルナックが自ら措定した教義学的前提であるとして批判している。というのは、新約聖書が宣教するキリストを（歴史的検証の結果であるかどうかはともかく）事実として措定することも教義学的前提としては同程度に可能だからである（Hermann Cremer, a.a.O., Vorwort）
- 34 vgl. Claus-Dieter Osthövener, Adolf von Harnack als Systematiker, in: *ZThK 99 (2002)*, S. 296-331.
- 35 *Das Wesen des Christentums*, S. 12.
- 36 Baeck, Preface to the English edition, in: *Leo Baeck Werke Bd. 1, Das Wesen des Judentums/hrsg. von Albert H. Friedlander...*, Gütersloh 1998, S. 423.
- 37 Baeck, Preface to the English edition, a.a.O., S. 423.
- 38 Werner Licherz, a.a.O., S. 175ff.
- 39 ハルナックはイエスの説教の最大の特徴は「彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」（マタイ 7: 29）という福音書の証言に帰せられるとする（*Das Wesen des Christentums*, S. 20）。従って主眼は「権威ある者」として振る舞ったイエスの人格にあり、説教の文言ではないということになる。
- 40 「律法学者たちやファリサイ派の人々は、モーセの座に着いている。だから、彼らが言うことは、すべて行い、また守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで、実行しないからである。」（マタイ 23: 2-3）
- 41 Werner Licherz, a.a.O., S. 177.
- 42 「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」（レビ記 19: 18）
- 43 ハルナックは、教理史というものを教理の成立と発展のプロセスとして提示した。したがって、いわゆる「福音のギリシア化」はキリスト教の「発展」の一過程であるということになる。ところが、ハルナックは同時にキリスト教を本質的なものとそうでないものに分離する作業を行い、ギリシア的要素はキリスト教の本質ではないと断じている。だとするならば、「福音のギリシア化」とは「発展」ではなく本質的ではないものが次々と覆いかぶさっていった「墮落」のプロセスなのではないかという指摘は、すでに同時代のローフスやゼーベルクらによって行われている（Friedrich Wilhelm Kantzenbach, Art. 《Harnack, Adolf von (1851-1930)》 in: *TRE 14*, S. 455, 457）。
- 44 Werner Licherz, a.a.O., S. 176.
- 45 ハルナックの死後、その蔵書から『ユダヤ教の本質』が見つかったが、それは未開封のままであった（A. H. Friedlander / B. Klappert, *Das Wesen des Judentums in unserer Zeit*, in: *Leo Baeck Werke Bd. 1*, a.a.O., S. 25.）。

- 46 *Das Wesen des Christentums*, S. 7.
- 47 Werner Licherz, a.a.O., S. 178.
- 48 拙稿「ハルナック『キリスト教の本質』におけるユダヤ観」『日本の神学』49号53-70頁参照。
- 49 たとえば、反ユダヤ主義を明確に掲げる A・シュテッカー (Adolf Stoecker, 1835-1909) とは福音主義社会協議会 (Evangelisch-Sozialer Kongress) において一時期ともに活動していたハルナックであったが、後に決別している。
- 50 Werner Licherz, a.a.O., S. 178, 184, Albert H. Friedlander / Bertold Klappert, *Das Wesen des Judentums contra das Wesen des Christentums: Baeck contra Harnack*, in: *Leo Baeck Werke, Bd. 1*, a. a. O., S. 16.

